平成23年7月1日発行　第38巻7号通巻461号（毎月1回1日発行）昭和50年10月27日第3種郵便物認可

Japan Overseas Educational Services
海外子女教育振興財団

海外子女教育

7
2011 No.461

特集1
多様化する公立高校
――帰国子女にとっての選択肢

特集2
国際機関で働く

海外校シリーズ
ヤンゴン日本人学校
サン・ホセ日本人学校
ヨークシャーハンバーサイド補習授業校

違いを乗り越えて平和を実現したい

ITTO
国際熱帯木材機関

造林・森林経営部　秘書
塙（はなわ） 真名子（まなこ）さん

1974年、東京生まれ。6歳から16歳までアメリカ・ロサンゼルスに在住。上智大学比較文化学部卒業後、フランス・ソルボンヌ大学で1年間フランス語を学ぶ。一児の母。

亡き父の足跡をたどって

いまも亡き父の存在が大きい。父・嘉彦さんは、著名な国際的ジャーナリストだった。フランス語に堪能（たんのう）で、『ル・モンド』紙、『エクスプレス』誌などフランスの一流紙・雑誌で活躍したのち、帰国して『中央公論』で編集者として活動。後に文芸誌『海』の編集長になり、一九七〇年代の同誌を伝説と言われるまでに押し上げたが、白血病のため四十五歳で亡くなった。

「私が五歳のときでした。残された母は心から父を愛していますから、私を父の足跡に触れさせるためにも、国際的な環境で子どもを育てたいと考えていました。父と母との間の長年の希望でもあったんです。それで、父を亡くした翌年にロサンゼルスに渡りました。母はUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）や神学校で学びながら、私と弟を育ててくれました」

母をこれ以上悲しませたくない。パパみたいにいちばんになりたい。その気持ちが、幼いころからずっとあった。ロサンゼルスの現地校でつねに成績はトップクラス。勉強に手を抜くことは決してなかった。

小学生のときに、現地の英才教育プログラムのメンバーに選ばれた。

「自分の才能が認められ、生かされるということを身をもって体験できたこと、努力が実を結ぶことを実感できたこと。これがいまの仕事をがんばれる原動力になっています」

母がアメリカでの勉強を終えたことに合わせ十六歳で帰国。推薦枠でICU高校に進んだ。日本でいちばん国際的な学校と聞いていたが、それまでほとんどアメリカしか知らなかったため、大きなカルチャーショックを味わった。

「自分が生まれた国でもあり、アメリカから日本の文化に憧（あこが）れていたんです。でも、実際の学校生活では文化の違いに苦しみました。日本を理解したいと頭で考えていることと、実際の心の中との葛藤（かっとう）があった。また、そういう年ごろだったのかもしれませんね。最終的には葛藤を乗り越えて、日本のよさ、アメリカのよさを公平に見ることができるようになったと思います」

大学卒業後、父が愛したパリに留学。フランス語を習得し、ヨーロッパの文化に触れ、バックグラウンドに持つ文化の幅をさらに広げた。

幼いころからの夢を実現

「さまざまな文化の狭間（はざま）にいる自分を意識したり、アメリカの多国籍文化に身を置いたりするなかで、子どものころから漠然と『国連で働きたい』と思っていました」

世界が一つになって平和という一つの目標に向かう。そういう世の中を夢に描いたとき、最もわかりやすい進路が国連だった。そして、フランスから帰国して通訳と翻訳の仕事をしているとき、ITTOが秘書を募集していることを知った。すぐに応募し、幾度かの

国際会議でのスナップ　後列左が塙さん

面接を経て九八年一月に採用された。

事務局長の秘書などを務めたのち、現在は事務局次長と三人のプロジェクトマネージャーの仕事をアシストする。ＩＴＴＯは、日本（横浜市）に本部がある唯一の国連条約機関で、世界中の熱帯林の保全を目指して活動している。「エコ」ということばでくくられるいわゆる環境保護的な活動ではなく、国際的な木材の取り引き、現地での雇用創出など、政治・経済的な側面から抜本的に環境問題を解決することを目指す。

上司はいずれも外国人。ＩＴＴＯ内での公用語は、英語・フランス語・スペイン語だ。仕事の内容は多岐にわたる。プロジェクトの管理、各国の政府・現地職員たちとの連絡、通訳・翻訳、国際会議の資料作成、国際会議の準備全般、レポート・プレゼンテーション資料の作成、データベースの管理など。上司がかかわる仕事の実務面は、ほぼすべて任されていると言っていい。

「国境を超えて本部の職員と現地の職員が一体となり目標を達成できたときがいちばんうれしいですね。三年前に気候変動に関する国際会議の準備を任されたのですが、六十カ国の出席者の窓口になり、案内状の送付からチラシづくり、ＶＩＰの案内などに奔走しました。時間感覚など文化がそれぞれ違いますから、そのさまざまな文化、歴史、宗教などを理解しておかなくてはこの仕事は務まらない。そのことを身をもって学びました。苦労しただけに、達成感も大きかったですね」

環境問題も人間同士の理解から

熱帯林がある南米や東南アジア、アフリカなどに出張することも多い。「写真などで見る美しい姿と、現実のギャップは想像以上にある」と言う。熱帯林の保護と一口に言っても、そこに暮らす人々の生活や経済活動、森林を抱える国の政治的思惑などが複雑にからみ合っているからだ。

「ＩＴＴＯがやっているのは、植林をして森を再生しようというようなことではなく、政治的・経済的なリアルな問題にかかわるギャップを調整しようということなんです。日米の文化の差を体感してきた自分の経験に似ている面もあります。それはとても生々しい体験でした。だから、環境問題のきれいごとでは済まされない面にかかわるいまの仕事に共感し、打ち込めるのかもしれませんね」

そして、環境問題の解決の糸口は「相互理解」にあると考えている。

「それぞれの国や国家間でもさまざまな取り組みをしていますが、国連機関は素直に平和の実現に向けて、泥くさい問題を解決しようとしている。環境問題と言っても、結局は人間同士がわかり合ったときに解決への道が開けるのではないでしょうか」

そんな国際機関の仕事に興味を持つ海外生・帰国生には、次のようなアドバイスを送る。

「バックグラウンドとか語学とかよりも、相手に理解してもらうこと、相手を理解する努力が大切だと思います。さまざまな環境、文化の中でたくさん苦労して、人間くさい部分を正面から見て体験を重ねた方がいい。違いを理解するのはたいへんです。忍耐も必要だし、時間もかかる。じっくり落ち着いてかみしめてほしい。そして、相手を許したり、許されたりということも大事なのではないでしょうか」

（取材・文＝内村浩介）